

(一財)長崎県剣道連盟

広報誌 第28号

剣道だより (KENDO Nagasaki)



立春の朝霧しづる枯枝かな / 臼田亞浪・・・立春の候

今年の節分は2月3日(金)です。したがって、今年は2月4日(土)が立春となります。コロナ禍のなか、暦の上では春と言っても日本ではまだまだ寒い日が続いています。もともと立春を定めた二十四節気は、古代中国の黄河中・下流域の季節感が反映されています。その地域ではどうやら1月が最も寒く、2月から暖かくなっていくようなのです。そのことで2月に立春になると言われています。2月も寒い日本ですが「立春」と聞くだけでも春が確実に近づいてきた感じがして、少し気持ちは暖かくなってきます。コロナ禍のなか、剣道の稽古にも優しい季節が近づいてきています。このような時こそ自己研鑽を究めていきたいものです。



写真：紅梅

「はっけよい！！」・・・平戸子泣き相撲(最教寺) 節分の日

節分の日には平戸市にある最教寺奥の院で「子泣き相撲」が開催されます。毎年、多くの参加者や見物客で賑わいます。一番乗りの家族は、午前0時から並び始めます。約150組300人の赤ちゃん力士の取り組みが行われます。参加した親子や待ちつかれて寝てしまう赤ちゃんなどもおり、会場は見物客からの歓声や笑い声などで包まれます。

子泣き相撲は、約400年前に平戸藩初代藩主松浦鎮信が家来の亡霊に悩まされていた時、赤子の泣き声で亡霊が退散し、その後悩まされなくなったという言い伝えがあり、これを起源として毎年節分の日に行われています。



平戸最教寺



平戸子泣き相撲(平戸最教寺)



平戸瀬戸を望む平戸城



「心形刀流」二刀の技

「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし」

松浦静山(1760~1841: 大作『甲子夜話』を著した文武両道の平戸藩第9代藩主) 随筆集『甲子夜話』の著者として知られるのが松浦静山。平戸藩世嗣・松浦政信の長男として生まれた。

柳生石舟斎から新陰流兵法を伝授された徳川家康など、江戸初期以前には武芸達者な将軍や大名も少なからずいたが、静山は江戸中期の泰平の世にあって「心形刀流」を究めて印可を受けた。そのほか弓・馬・槍術や柔術まで武芸全般の修行を積んだ経験を持つ。

文武両道で、さらに吉原で通人として知られたという静山の言葉「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし」は現在でもビジネスにも通じる鉄則といえるだろう。

隠居後に20年かけて綴り続けた随筆集『甲子夜話(かっしやわ)』の著者として名高い。松浦氏は嵯峨源氏の末流にして鎌倉時代から平戸に土着していた半海賊集団「松浦党」の末裔で、静山も松浦党の誇りを持ち文武両道に優れた若者だったという。江戸時代を代表する随筆集である。内容は、大御所・家康に関する逸話から、田沼意次時代から寛政の改革時代にかけての政治、自身の青年時代の回想、諸大名や民衆の暮らし、町の噂、ろくろ首の奇談まで非常に幅広い。特に、同時代の盗賊・鼠小僧については逮捕から処刑までが詳細に記されている。好奇心旺盛だった静山は蘭学にも関心があったようで、入手したオランダ製の地球儀が松浦史料博物館に保管されている。ちなみに17男16女に恵まれた子たくさん静山だったが、そのうちの十一女・愛子は公家に嫁ぎ慶子を生み、この慶子がのち孝明天皇と結婚し、明治天皇を生んでいる。静山は明治天皇の曾祖父にあたるのである。

(ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 松浦静山より)



平戸藩主 松浦静山(清)

報告(1)・・・令和4年度全国高校選抜大会長崎県予選 優勝 男子 長崎南山 女子 島原

標記大会が令和5年1月15日(日)佐世保市小佐々スポーツセンター体育館で開催された。男子団体は準決勝に勝ち上がった長崎南山・五島・長崎日大・島原の4校で決勝リーグを実施。最終戦、島原高校と長崎南山が二勝同士で対戦。南山先鋒白石和磨が見事なコトとメンを決め先勝。三引き分けのあと、大将戦では南山大将戸田優人が面を決め2-0で島原を下し2年連続7回目の優勝を果たした。女子団体決勝は島原対西陵の戦いとなった。島原先鋒山田優生がドウを決め先勝。二引き分けのあと島原副将畚田有亜が小手を決め、2年ぶり14回目の優勝を果たした。男子長崎南山・島原の二校と女子島原は本年3月26日～28日愛知県春日井市で開催される全国選抜大会に出場する。県代表として全国制覇を期待したい。

(令和4年度全国高校選抜大会長崎県予選 結果詳細は県剣連ホームページに掲載)



男子優勝 長崎南山高校 2年連続7回目



男子2位 島原高校 (全国大会18回目)



女子優勝 島原高校 2年ぶり14回目

【男子団体戦】参加校 24校			【女子団体戦】参加校 15校		
優勝	長崎南山高校		優勝	島原高校	
準優勝	島原高校		準優勝	西陵高校	
3位	五島高校		3位	瓊浦高校	
3位	長崎日大高校		3位	西海学園高校	
最優秀選手	畚田有亜	島原高校	最優秀選手	白石和磨	長崎南山高校
優秀選手	寺川 舞	島原高校	優秀選手	戸田優人	長崎南山高校
優秀選手	野口陽心花	西陵高校	優秀選手	脇本得喜	島原高校
優秀選手	作本 悠	瓊浦高校	優秀選手	坂本一将	五島高校
優秀選手	堤田さくら	西海学園高校	優秀選手	本田愛斗	長崎日大高校

【男子団体決勝リーグ戦】優勝 長崎南山高校 2年連続7回目 (2年連続8回目出場)							
2位 島原高校 18回目出場 (令和4年インターハイ優勝)							
	長崎南山高校	○	②	—	0	×	島原高校
先鋒	白石 和磨	○	コメ	—	×		長澤 朋樹
次鋒	小川 達也	□	メ	—	メ	□	緒方 隆大
中堅	永吉 和馬	□		—		□	神原 陸人
副将	水口 快	□		—		□	三雲 潤
大将	戸田 優人	○	メ	—	×		脇本 得喜
【女子団体決勝戦】 島原高校 2年ぶり14回目の優勝 (2年ぶり14回目出場)							
	島原高校	○	②	—	0	×	西陵高校
先鋒	山田 優生	○	ド	—	×		中江 みのり
次鋒	鈴木 夢乃	□		—		□	野口 陽心花
中堅	久田 柑花	□		—		□	梅原 はな
副将	畚田 有亜	○	コ	—	×		山浦 未羽
大将	寺川 舞	□		—		□	伊藤 智尋

読み物(1)・・・剣豪「昭和の剣聖：小島 主」 (現代剣道百家箴より)

小島 主 (1906・明治39年～平成3年)

長崎県諫早市、明治39年対馬、巖原町の曹洞宗法泉寺で生まれる。

全日本剣道連盟審議員(13年間)、剣道範士九段(67歳)、地元諫早で天道館剣道場(昭和46年)に開き小中学生70名を指導。

「尊い体験」 剣の道と人生

敗戦後、満洲新京(現長春)から引揚げ、栃木県鬼怒川温泉の奥、海拔千百メートルの山中に満7年間開拓百姓として入植した。

「清く、正しく、強く」を信条

「清く、正しく、強く」を信条として剣一筋に生きて来た私には、戦後の腐敗した閨屋の生活は出来ない。その間晴耕雨読の毎日であったが朝夕必ず立木を相手に剣道形の独習を一日も欠かしたことがなかった。又、一日幾千回振り下す一鍬、一鍬を、切り返し練習と心得、心魂を込め実行したものである。それは、前後10年間の空白を埋めるところか得た境地は二度と再び得難い修練の場であった。当時の新聞紙上に「昭和の宮本武蔵、磯畑伴造(講談などで新陰流の使い手とされる)山に籠もる」と書かれたものだ。形独習による戦後の剣道を続けてきた私は、剣道修業に形を最重要視するようになった。

一本目は相上段。二本目は相中段。三本目は相下段と形を気にしてやっける内は形にとらわれてこちこちの形になり、心身の自由を失い、形の型に終りがちだが、それが無の境地になり、水の流れる如くさらさらと形が演ぜられるようになれば姿勢、間合、手の内、気位等々、風格ある剣が生まれてくる。一本一本の形から変化する技を稽古に、試合に、如何に実地に應用するかを研究すべきである。

試合後、稽古後、審判後、帰宅して必ず反省検討することになっているが、打ちっぱなし、打たれっぱなし、審判しっぱなしでは進歩向上はあり得ない。快心の打突を出した場合、文句なく打突された場合、審判の可否は細心に反省検討研究すべきである。このことは今も怠ることなく実行している。

「剣一筋」に生きぬくことが私の信条である

先生、先輩の稽古試合は、全神経を集中して見学するが、如何に勝った技も決して真似しようとは思わない。又真似た経験もない。各人各様、体力、能力、研究修業の度合もちがうし、器用、不器用の差もある。自分独自の技を生み出し、小島独自の剣道を完成したい。

酒で開眼 若いころから酒は相手次第でよく飲み、強くもあった。或る時、先輩(柔道)の実力者(今は故人)と二人で飲んでいて。先輩曰く「君、酒はうまいか。」と「いや、別にうまくない。相手がないと一滴も飲まないよ。」「君と飲んでいるとどうも気分が余裕がもてず窮屈でかなわん。君は酔うまい、崩れまい、乱れまい、と酒を殺して飲んでい。酒に飲まれて乱れない人間でないと大成せんよ。」と訓された。

その後は酒を飲んでも気が楽になり、酒もうまくなったが、量は少なくなった。剣道も同じこと、打とう、打たれまい。勝とう、負けまい。と肩肘張ってやっける間は、気があせり畏縮し、伸び伸びした無心の技は出ない。へとへと、くたくたになるまで、心身を鍛えて、なお崩れない剣道こそ、真の道と喝破(かっぱ)したが僻目(ひがめ)だろうか。

剣道は「位、気、技」で「のる」ということ

剣道の常用語に「のる」という言葉がございます。これは剣道のみに限らず、対人関係に於いて非常に必要なことではないかと思えます。

剣道で「のる」か「のられる」か、のったものは必ず勝つ、のられれば負けるとか言われています。私は「のる」という事を分析してみまして三つに分けています。まずは、位でのるか貫録でのるか、初対面で「位」、貫録でのられてしまえばそれで勝負あり、いわゆる位負け、貫録負けであります。次に「気」でのる、気力で相手を圧倒する、そして「技」でのる。この三つが「のる」を分析したものになるのでないかと考えます。



諫早市の自宅庭にて



天道館剣道場にて